

## 記憶装置の変遷

JJ1SXA/池

去る5月、山口県阿武郡阿武町の誤給付問題(給付金4,630万円を住民1人に誤って振り込んだ問題)で騒がしかったが、阿武町役場から銀行への振り込み依頼書の受け渡しに、フロッピーディスクが使われたというのが、一寸驚きでした、もう、とっくの昔に、フロッピーディスクの使命は終わり、過去の遺物となっていると思い込んでいたので、PCでフロッピーディスクが現在も使えることに驚いたのです、調べて見たら、確かに、「外付けUSB接続のフロッピーディスクドライブ」というのも市販されています、そんなわけで、記憶装置の変遷を一寸調べて見ました。

皆さんにはご存じのことでしょうが、私には新しい発見もあり、例により、備忘録のつもりで記事に残すものです。

パソコンの外部記憶装置は、磁気ディスク(HDD)のようにパソコンに必須で通常は内蔵されているものと、CD-ROMやUSBメモリのように装置(ドライブ)と媒体(デバイス)が別になっているもの(リムーバブルデバイス)に大別できるようです。

現在のパソコンでは、HDDが故障するとパソコン全体が使えなくなってしまう、それはOSや基本的なソフトウェアが磁気ディスクに入っているからだ。

これは汎用コンピュータでも同じようだが、初期のパソコンでは、OSなどの規模が小さかったし、パソコンに使うような安価なHDDが開発されていなかったため、OSなどをROMに書き込んでいたのだ、そのためHDDが無くてもパソコンが使えたのだ。

1,980年代になると、MS-DOSのようにOSが大きくなったこと、HDDが安価になったことから、現在の方式に移行したようで、その後、HDDは小型化、大容量化、高速化が進んだ、しかし、HDDは回転機構をもつことから限界があり、2,000年頃から、半導体素子を用いたSSDが目されるようになったようだ。

データやプログラムの保管や他人への配布のためには、リムーバブルデバイスが必要であり、大きな流れとして、カセットテープ→フロッピーディスク→光磁気ディスク(MO: Magneto-Optical disk)→光ディスク(CD-ROM→CD-R→DVD)→USBメモリへと大容量化、利便化が進み、2000年後半には新しい光ディスクであるブルーレイディスクが出現したのだ。

ブルーレイディスクは、DVDの後継となる光ディスクであり、第3世代光ディスクの一種でもある、青紫色半導体レーザーを使用する。

知らなかったな〜の話…ブルーレイディスクは、「Blue-ray Disk」では無く、「Blu-ray Disk」が正しい、青紫色半導体レーザーを使用するので、青は、「Blue」だが「Blu」で「e」が無いのだ、何故か?の答えは「Blue-ray」とすると一般名称になるとの指摘があり、それを避けたのだそうだ。

もう一つ、一般用語のお皿は「dinc」だし、昔のレコードも「disc」だが、HDDやDVDは「disk」だ、どうも音楽分野では「disc」、コンピュータ分野では「disk」という歴史的習慣によるものらしいとのこと。(末尾が「c」と「k」の違い)  
(2022年8月記)